

## (一) 洗礼

宗教改革が、洗礼の礼典においてなした改革の最大のもは、これを公的礼拝の中に取り戻したことであった。「指針」は、「洗礼は……私的個人によつてでなく、神の奥義の管理者として召されているキリストの役者（牧師）によつて執行されるべき」と、「私的な場所においてでなく、公的礼拝の場所で、会衆の前で、人々がそれを容易に見たり聞いたりできるのに最も都合のよい所で、執行されるべき」ことを明言している。洗礼による新生という魔術的理解から、洗礼を急ぐあまり私的に執行されていたことに対する明白な否定である。

オールドは、改革者たちの洗礼に関する見解を次のようにまとめている。<sup>18</sup>

- ① 改革者は、礼拝は聖書にかなったものでなければならぬことを強調した。しかし、それは単なる聖書主義とは別のものである。彼らは、礼拝は、神が御自身の民の中で御業を行われることであると理解した。礼拝は、民の神への奉仕である前に、神の御業である。洗礼は、神によつて与えられたしるしである。従つて、洗礼は神の御言葉にかなつて執行せらるべきである。そうであれば、洗礼は、神がこの礼典に本来的に与えられた「洗ひ」としてのしるしの単純さと明瞭さを保持すべきである。改革者は、これ以外の補助的なしるし、「しるしをおすこと」「悪魔との縁を切ること」「油をそそぐこと」等は、本来のしるしをあいまいにしてしまふと考へた。さらに初代教会の洗礼の実例から、執行の仕方についても極めて単純で直接的なものをも復した。

改革者たちは、「禁じられていないことは許されている」と、「命じられていないことはゆるさされていない」のどちらかを選択するつもりはなかった。また、ライン川上流地方の改革者は、アディアフォラの原理をルターのように適用することもしなかつた。たとえばエコランパディウスは、幼児洗礼のように聖書が特に命じていない問題を擁護するとき、聖書の基本的な教えと調和する仕方でのみ答へた。キリスト者の子の洗礼を聖書は直接教えていないとしても、教会は、恩寵の先行性、契約共同体内の子の位置（割礼と洗礼の間のアナロジー、神の国への入会のしるしとしての洗礼）を、聖書が教えているゆゑに幼児洗礼をすべきであると説いた。

- ② 第二に、改革者は、御言葉と礼典の一致を強調した。洗礼の際の勧めの言葉を重視し、かつ、カテキズム教育を重んじた。多くのカテキズムが書かれ、それに基づく説教が四世紀の実例にならつて回復された。

- ③ 第三に、改革者は洗礼における水と聖霊の統一性を強調し、従つて一つの洗礼を主張した。つまり、水の洗礼と聖霊の洗礼に分ける考えを否定し、後者を堅信礼として礼典に数えることを否定した。水の洗礼は罪の赦しのしるし、堅信礼は油注ぎと按手により聖霊の受領のしるしとして分ける見方を否定した。そして、改革者は、水の洗ひを受けた者が、聖霊のたまものにかゝるよう祈る祈りを、洗礼執行後にしないように、慎重にこれを避けた。聖霊を求める祈りは、水と霊の一致を示し、水の洗礼は罪の洗ひ清めと聖霊の注ぎのしるしであることを示すために、洗礼の洗ひの前に置かれた。

「指針」は、洗礼の前に「（洗礼の）霊的用途のために水を聖別するために、制定の御言葉に祈りを加えられなければならぬ。」と言ひ、その祈りの中で「主が、外的な水の洗礼に御自身の御霊の内的洗礼を加えてくださり、幼子にとり、この洗礼が、子とすること、罪の赦し、再生、永遠の生命、恵みの契約のその他の約束のしるしとしてくださるよう」と祈るよう指示している。

④ 第四は、洗礼を受けた幼児に対するその後の牧会的配慮である。洗礼に不可欠のカテキズム教育と誓約とは、幼児が教理教育を理解し、それに基づいて誓約ができる年齢まで延ばす。幼児洗礼の時の親の誓約は、親の信仰の告白であって、子の誓約に代わるものではない。本来の洗礼の誓約は子自身がしなければならぬ。礼拝次第の中にカテキズムを加えることは、最初ストラスブルの礼拝様式の中に見られ、ジュネーヴ教会に受け継がれた。「ジュネーヴ教会信仰問答」(長いもの、簡易なものを含めて)はこのために作成された。洗礼を受けた幼児は、十歳頃には会衆の前で、簡易な信仰問答を牧師と問答して信仰のあかしとした。<sup>15)</sup>ただし、教理教育と信仰の誓約がなされなければ洗礼は完結してはいないとは考えられていない。キリストの御名による水の洗いで洗礼のしるしそのものは十分である。このしるしには、教理教育と誓約が伴わなければならないのである。

洗礼の礼典の祈りには、必ず恵みのうちに成長させてくださいとの祈りを伴う。そしてこれはキリスト者の毎日の祈りとなる。そこで洗礼は、キリスト者の生涯にわたってしるしとなる。神は洗礼のしるしに忠実であり、聖霊により、毎日にキリスト者を清めて新たにし、罪に死に、キリストに生きるようにしてくださる。「指針」は、「幼児が、思慮分別ある年齢に達するならば、主が御自身の御言葉と御霊によって教え、その洗礼を有効としてみてくださいるように」祈る。この祈りは、先に親に対して、「その子をキリスト教信仰の基礎についての知識と、主の薫陶と訓戒によって育てるように」との勧告がなされたことと関連している。また、「子がキリストの死と復活の様に似た者に造り変えられ、罪の体が滅び、全生涯にわたり、新しい命のうちに神に仕えることができるように」と祈る。

「指針」の中には、「悪魔とこの世と肉と縁を切り」という言葉が見られる。改革者は、洗礼はほとんどキリスト者の子にさづけられるのであり、契約の子として恵みのもとにあり、清い者であると理解しているので、「悪魔との縁切り」の祈りは不適當であると考えた。「指針」は、「この世と肉」を付け加え、さらに「戦う義務」に触れており、キリスト者の生涯の清めとの関係でこの言葉を留めたものと理解される。

⑤ 改革者が、洗礼について強調する第五の点は、洗礼を契約のしるしと見ることである。契約神学は、改革派教会において礼典論そのものであったと言える。それは先ずペリカン、カピト、エコランパディウス等のライン川上流地方のキリスト教人文主義者による、ヘブライ語研究に基づいて開拓された。エコランパディウスとツヴィングリは、契約神学が幼児洗礼の妥当性の説明に役立つとみた。カルヴァンとプリンガーは契約神学を包括的な礼典論へと仕上げた。「指針」は、信者の子は「福音の下でも、旧約時代のアブラハムの子と同じように、契約にあずかる権利、契約のしるしへの権利、教会の外的特権への権利」をもっていると教える。これにより、古い契約と新しい契約は恵みの契約として連続していることが明らかにされる。

契約神学の再発見との関連で特に大切なのは、聖書における「しるし」の理解が深められたことである。神が与えるしるしは、神の民の信仰を啓発し、増し加え、力づけるものである。神の与えるしるしは、きわめて大切であるゆえに、これを他の人間の発明と混同されないように改革者は注意した。改革者が、その時代の儀式の多くを捨て去ったのは、目に見えるしるしを否定し、御言葉のみを重んじたからではなく、聖書において、神があたえられたしるしのみを重視するためであった。

⑥ 最後に、最も重要なこととして改革者が強調したことは、洗礼の礼典は恵みの礼典であるということである。改革者は、一方では中世後期スコラ主義が結びついたペラギウス主義と、他方では一六世紀のアナバプティズムとも異なり、恩寵の神学に基づく洗礼の礼典論を主張した。アウグスチヌスの聖書の恩寵の教理を回復

するとともに、アナバプティストに対しては、幼児洗礼はキリストにある神の恵みと矛盾しないことを主張した。「指針」の洗礼の立場は、この点において完全に宗教改革の立場を受け継いでいる。

「指針」の内容が会議において議論されるときに、最初から一番議論が沸騰したのはなんといいても、洗礼の様式、つまり浸礼か滴礼かをめぐるのであった。結果的には滴礼の立場が採用された。「ただ顔に水を注ぎ、あるいはふりかけるのが合法的であるだけでなく、十分かつ最も便宜的である。これ以外にはなんの儀式も加えない。」

## (二) 主の晩餐の礼典

### ① 主の晩餐において働かれる神

「指針」は、主の晩餐の聖別の祈りにおいて、「聖餐の礼典において、キリストとそのすべての祝福がわれわれに適用され、印せられる」との重要な用語を用いる。「適用し、印する (applied and sealed)」主語は神である。つまり、主の晩餐の礼典においては神が「行為される」のである。つまりこの礼典を通して、神の約束が現実的となることを保証するという意味で、神はここで今働かれるのである。「指針」が、「牧師は、この聖なる行為に相当するだけのふさわしい感情 (affections) をこめて語り (perform)、会衆のうちと同じ感情が起こるように努めなければならぬ」との言葉とともにしるす祈りの言葉は、聖餐に関する指針の中で最も美しい部分である。少し長いが引用する。

「イエス・キリストの御名以外に、われわれがよってもって救われるべき他の名は、天の下に一つもないことを告白すること。このイエス・キリストによってのみ、われわれは自由と生命を受け、恵みの御座に近づき、主御自身の食卓で飲み食いを許され、幸福と永遠の生命の確かさをその御霊により印証せられるのである。」

すべての慈愛の父である神、すべての慰めのもととなる神に向かい、熱心に祈ること。御自身の恵みに満ちた御臨在と、われわれのうちにおける御霊の有効なるお働きをいただき、それにより、このパンと葡萄酒の二品を聖別し、くださるように、そして御自身の規定 (ordinance) を祝福し、われわれが信仰をもって、われわれのために十字架にかけられたイエス・キリストの御体と血を受けることができ、またイエス・キリストを食することによって主がわれわれと一つとなり、われわれが主と一つとなるように、かくて、主がわれわれのうちに生き、われわれを愛し、われわれのために御自身を与えてくださった主のうちに、また主のためにわれわれが生きるように、熱心に祈ること。」

ここには、主の晩餐の礼典の開始の祈りに見られる、カルヴァンの聖餐理解と敬虔が受け継がれていることがわかる。ジュネーブ教会の聖餐式の祈りは「わたしたちの主イエス・キリストは、一たび、十字架において、御からだと御血とを、わたしたちの罪の赦しのために捧げたまはかりでなく、また、これを永遠の生命における食物としてわたしたちに与えたまいました。それゆえわたしたちは心のまことの誠意をこめ、またはげしい熱心さをもって、彼からかかる大いなる贈り物と利益とを受けることができまますように。また、かたい信仰をもってその御からだと御血とを、いな、まことの神・まことの人である彼が、また真にわたしたちに生命を得しめる天上のパンでありたもうとして、彼のすべてを受ける恩寵にあずからせてくださいませ。」<sup>98</sup>

## ② 主の晩餐の礼典の回数

主の晩餐の礼典は、われわれを一層緊密に主イエス・キリストに結び付け、それによりわれわれを信仰において一層強くすることにより、神の約束を堅固にするものであるならば、礼拝においてこれをなおざりにすることは正

しくない。カルヴァンは「キリスト教綱要」四卷一七章四六節において、ローマカトリック教会が一年に一度聖体に与ればよいとして、それを強く非難する。「たしかに、年に一度だけ聖晩餐にあずかることを命じる風習が、悪魔によって発明されたものであることは、最も確実である。……しかし、なされねばならないことは、これとは異なるかにへだたつたものである。すなわち、すくなくとも週に一回キリスト者たちのために主の食卓が繰りひろげられ、われわれをそれによって霊的に養う約束が宣言されるべきである。」

カルヴァンがジュネーブ教会において実際になしえたことは、年四回の主の晩餐を行うということであった。これは形の上では、一五二五年のツヴィングリの礼拝改革における主の晩餐の回数と同じである。ツヴィングリは、一五〇六年以来チューリヒの教会が用いた新しい聖書日課に基づく礼拝形式を採用し、年四十八回の礼拝はこれによって行つた。彼の、「肉は無益、霊のみ有益」とする精神(霊)主義は、主の晩餐の理解にもおよんだ。カルヴァンとツヴィングリの相違を別の言葉で言い表すとすれば、カルヴァンは主の晩餐を、御言葉の説教と共に、神の行為と理解し、民はそれに与かることにより神への信仰と感謝をもって応答すると理解した。一方ツヴィングリは、主の晩餐は基本的に、御言葉において示される神の行為に対する民の応答であると理解した。カルヴァンは、主の晩餐の内容を貧困にするツヴィングリの聖餐論は採らず、礼拝においてその豊かな内容と祝福があらわれるように努めた。結果的には、年四回という点でツヴィングリと同じになつたとしても、改革派教会はカルヴァンの聖餐論を受け継ぐことにより、量り知れない祝福を受けるのである。

「指針」は、主の晩餐の礼典はしばしば祝われるべきであるとの原則を明らかにしているが、実際は「どのくらいの頻度で行うかは、各個教会の牧師と長老(教会統治者)が、自分たちの責任に委ねられている会衆の慰めと教化のために一番適當であるとおもふところをよく考へて決定すべきである。」とする。

宗教改革の時代には、正しい礼拝は、御言葉の朗読と説教を中心とする前半と、主の晩餐を中心とする後半とがなければならぬと考えられていた。しかし、何世紀の間一般民衆は、年一回の聖体拝領になれていたので、毎週の晩餐に切り換へることは困難であった。年四回というのはまさに牧会上の配慮から生まれた妥協であった。問題は宗教改革が定着して、改革派教会の礼拝が受け入れられてから後のことである。聖餐論においてはカルヴァンを受け継ぎながら、実際の礼拝においてはツヴィングリの様式に従つたのである。いいかえれば、改革派教会の伝統においては礼拝の様式が議論されるときには、御言葉の説教の位置すら確保されておれば、それ以外の要素は牧会上の問題として処理されてきたことになる。

### ③ 陪餐の仕方

「指針」の作成にあたり、もっとも激しく議論された問題は、主の晩餐の与かり方であった。「指針」は、「聖餐卓の周りに、あるいは聖餐卓に向かつて」という表現を採り入れた。スコットランドでは、陪餐者は聖餐卓の前に進み出てそれを取り囲み、イングランドでは会衆席に着席したままで陪餐した。その両方の主張を採り入れた表現になつている。

## 四、感謝と讚美

### ① 改革派教会の礼拝における感謝と讚美の要素

ウォルタストフは今日の改革派教会の礼拝を次のように批判する。「改革派教会のリタージ理解の神髄は、リター

ジにおいて神は、わたしたちに対して愛をもって行為し、わたしたちは、聖霊の働きにより、信仰と感謝をもって神の行為を受け入れる、ということである。しかし、改革派リタージには、初期の頃から、神の行為を、讚美、感謝、崇敬をもって受け入れるように奨励されるが、会衆は、リタージの中でそれらを行う機会がほとんど与えられてこなかった。……奨励の要素がワーシップの要素を圧倒している。」

ウォルタストフはさらに、改革派教会のリタージが、聖書朗読と説教の前に、聖霊の照明を求める祈りをおいたことはすばらしいことであるが、同時に、古くから聖書朗読を取り巻いて行われてきたもの、たとえば、「アレルヤ」「神に感謝」「主に栄光あれ」「キリストをほめまつる」「応答の詩編」等がなくなったと指摘する。<sup>110</sup>

「指針」は、説教のあとの祈禱の最後の部分で、「祈りのあと、もしさしつかえなければ詩編を一つ歌うべきである。」と述べ、主の晩餐の陪餐のあとには牧師が厳粛な感謝をささげなければならないとある。ウォルタストフの指摘する通り、確かに会衆が感謝と讚美をささげるときが少くないと言える。ただし、公的礼拝は「主の日」の中の一部にすぎないのであり、その他の時間には、「詩編を歌うこと……安息日を喜びとするような、敬虔、愛、憐れみの義務に用いる……」という規定がある。また「公的感謝日の遵守に関すること」の中には「詩編讚美、一層の讚美と感謝の奉獻等の式次第が……」という規定がある。「指針」全体として、会衆の讚美と感謝をうながすだけでなく、礼拝式次第の中にそれが位置づけられるべきであることは、十分に自覚されていたであろう。ただしこの「指針」の精神を正しく理解して自らの礼拝式を組み立てる努力がなされたかどうかということは別の問題である。

## ② 詩編歌

改革派教会の礼拝における讚美と感謝の要素として、最も大きな貢献をしたものはジュネーヴ詩編歌である。詩

編歌の最大の特徴は「頌栄」の要素である。これを最大の遺産として改革派教会は自らの教会の中でもう一度取り上げる努力をすべきである。<sup>111</sup>

## 四、結 び — 礼拝と生活 —

カルヴァンは、主の晩餐の礼典は「われわれに、愛と平和と一致とに勇気づけ、熱気を燃え上がらせるものとして、これ以上に強烈なものはない。」と説く。<sup>112</sup>「指針」にも、主の晩餐に会衆全員が与かったあと、この礼典において差し出されたイエス・キリストにおける神の恵みに「ふさわしく歩むように勧める。」とある。

しかし、ウォルタストフは、礼拝と生活の関係をめぐって実に鋭い警告を行っている。「もし礼拝において、われわれに対して語られる神の御臨在を理解しても、礼拝そのものの中で、この神の言葉に対する応答を、讚美と崇拜として捧げる機会を与えられなければ、また、礼典による神の養いにあずかることが二の次にされるならば、その結果は、礼拝における神の行為への十分な外的応答の延長線上にあるものとして、この世におけるわれわれの働きを、トータルにとらえることはほとんど不可能であろう。」<sup>113</sup> 改革派信仰の特徴は、信仰と生活、礼拝とこの世の業を、一元的にとらえることにありと主張しているだけに、この警告を真剣に受け止めなければならないと思う。

### 注

(1) 礼拝の歴史の研究とともに、カルヴァンのジュネーヴにおける礼拝式が、改革派のみならず福音派教会の礼拝のモデルたりうる、との理解が生まれてきた。しかし、現実には、改革派・長老派の礼拝の形式は多様である。例えば、Forrester, Duncan and Murray,

Douglas, ed., *Studies in the History of Worship in Scotland*. T & T. Clark, 1984.

- (2) 日本基督教団・改革長老教会協議会発行『教会』(季刊)。
- (3) The Directory for the Public Worship of God. (1) The Publication Committee of the Free Presbyterian Church of Scotland 発行の、同教会公文書集によった。
- (4) 松谷好明『ウエストミンスター神学者会議の成立』、自費出版、一九九二。
- (5) "ordinances" という語は、教会統治論、礼拝論における基本的な用語である。教会がなすべき業としてキリストが聖書において命じておられる事柄を指す。その内容の理解は、時代とともに変化が見られる。「規定」という訳語が一般的には用いられるが、意味を十分に伝えるものではない。
- (6) 『ウエストミンスター信仰告白』第一章六節、「神礼拝と教会統治に関しては、常に守られなければならない御言葉の通則に従い、自然の光とキリスト教的分別によつて規制されなければならない、人間行動と社会に共通のいくつかの事情があることを認める。」
- (7) 後藤憲正著、大森講座II、『改革派教会の礼拝』第一部・礼拝式の構造、新教出版社、一九八七。著者は「指針」の祈りの言葉を非難しているが、その意図がどこにあるのか理解に苦しむ。
- (8) 『キリスト教古典叢書』第八巻「カルヴァン篇」、新教出版社、一九五九に渡辺信夫訳が入っている。
- (9) Forrester & Murray 編、前掲書参照。
- (10) "service of God", "Gottesdienst" の属格は主格的にも目的格的にも用いられる。
- (11) 『キリスト教教父著作集』I、「エステイونس」、『第一弁明書』五二六七、『教文館』一九九二。
- (12) カルヴァンは聖書の朗読はその日に説教される箇所限定した。これに対して「指針」は、カトリックとアングリカンが採用している聖書日課に替わるものとして聖書の連続朗読を求めたものである。
- (13) Ryken, Leland, *Worldly Saints — The Protians As They Really Were—*, Zondervan, 1990.
- (14) Old, Hughes Oliphant, *The Shaping of the Reformed Baptismal Rite in the Sixteenth Century*, Eerdmans, 1992.
- (15) ジョン・カルヴァン、渡辺信夫編訳、『シメネーヴ教会信仰問答』— 翻訳・解題・釈義・関連資料—、新地書房、一九八九。
- (16) 前掲「カルヴァン篇」。
- (17) Wolterstorff, N., "Reformed Liturgy" in Mckim, D.K. ed., *Major Themes in the Reformed Tradition*, Eerdmans, 1922.

(日本基督教改革派・神港教会牧師)